

世界に友達を

大崎町と世界をつなぐ14人の小さな物語



ケン コルソン
Ken Coulsonさん

アメリカ、オレゴン州出身。妻の泰代さんと英語教室を経営しながら、自らも生徒に英語を教えています。大崎の子どもたちが世界を知る機会をつくりたいと、教室の生徒たちと国内や海外を訪れる研修旅行もおこなっています。

私は2008年から15年ほど大崎に住んでいます。近所の人のほとんどは私を知っているはずなのに、目が合うだけで、交流がないのです。「こんにちは」とか一言かけてくれるだけで良いのですが、近づき方が分からないのだと思います。

「こんにちは」とか一言かけてくれるだけで良いのです

アメリカ海兵隊の隊員として沖縄にいたとき、英語学校で働いていた大崎出身の妻と出会い結婚しました。妻の母が病気になったとき、母を早くに亡くした私は、妻に大崎に帰るように説得しました。大崎に戻ると、妻の中学や高校時代の友人が、子どもにも英語を教えて欲しいとやってきました。生徒の数が増えてきたので、「Charmed Steps」(幸運に恵まれた道のり)という意味)という英語教室を開きました。子どもは話すことが大好きです。教室では「あなたの意見は?」「あなたはどうか考

大崎町は多文化共生を推進しています。多文化共生とは、国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていこうという考え方です(注1)。大崎にも広い世界からやってきた人々がいます。この特集記事では、大崎と世界をつなぐ人々のお話しを伺いました。それぞれの話には、遠くて近い世界の面白さや、異なる文化を持つ者たちが上手く付き合っていくためのヒントが詰まっています。ぜひ、あなたの近くにいる遠い世界から来た人とも交流してみてください。そして世界の文化の豊かさを楽しんでください。

える?」とよく聞きます。これが私の文化です。疑問を持つと正しい答えが見えてきます。話を聞いて、さまざまな良い刺激を与える。これさえあれば子どもたちは大丈夫です。

「あなたの意見は?」「あなたはどうか考える?」とよく聞きます。これが私の文化です

生徒たちと、シンガポール、アメリカ、京都などへ旅行に行きました。大崎には電車にも乗ったことのない子どもがいます。親がさせてあげられない経験をさせてあげたいのです。特に、私の故郷、オレゴンへの旅はとても充実していました。現地の教師が熱心に準備をしてくれて、学校でさまざまな教科の体験授業を受けました。「初めて先生にほめられた」と、喜ぶ生徒もいました。コロナが終わったと言えるようになって、オレゴンを訪ねたときのように、子どもたちの心に一生残るような旅に連れて行きたいです。

〔注1〕総務省、2006年「多文化共生の推進に関する研究会報告書」より

グエン ティ アン トエット
Nguyen Thi Anh Tuyetさん

愛称ユキさん。ベトナム、ゲーアン出身。19歳で農業を学ぶために来日してから8年近く鹿児島に住んでいます。大崎に住むベトナム人の支援や、地域住民との交流イベントを実施しています。

写真提供:本人

